

【論文】

新たな学習英文法の構築に向けて －「主語と動詞の一致」の問題を手がかりとして－

廣瀬 浩三

0. はじめに

本稿では、TOEICにおいて頻繁に問われる文法項目の一つである「主語と動詞の一致」(Subject-verb agreement)の問題をケーススタディーとして取り上げ、現代英語におけるその実態を記述すると共に、従来の英語学的研究、並びに TOEIC などでは求められる実践的な文法力を踏まえつつ、学習英文法(Learner's Grammar of English)の立場から、どのような文法知識を身につけていくべきなのかを考察していきたい。

1. 英語における主語・動詞一致の原則について－記述文法の立場から－

1.1. 一致の現象とはどのようなものか

まず、‘agreement’あるいは‘concord」と呼ばれる「一致」の現象についての定義を再確認しておく、以下ようになる。

- (1) ‘formal agreement between words as parts of speech, expressing the relation of fact between things and their attributes or predicates’ —OED

もう少し詳しく述べると、「一致」(agreement, concord)というのは、2つの文法要素の一方に優位性があり、他方に影響を与え、格(case)、数(number)、性(gender)、人称(person)の形式を決定し、相互の文法関係を表す文法現象のことを言い、その典型的なものの一つとして、「主語と動詞の数の一致」がある。

では、現代英語において、どのような原理が主語と動詞の一致を司っているのだろうか。以下、Quirk, et. al (1985)にしたがって、文法的一致の原理(the principle of grammatical agreement)、概念的一致の原理(the principle of notional agreement)、近接(the principle of proximity)の原理を順に見ていきたい。

1.2. 主語・動詞一致をつかさどる3つの原理

まず、文法的一致の原理は、以下のシンプルな規則によって決定される。

(2)(i)単数名詞は単数動詞形を要求する。

My daughter watches television after supper.

—Quirk, et. al (1985)

(ii)複数名詞は複数動詞形を要求する。

My daughters watch television after supper.

—*ibid.*

(2)の原則を句レベル、節レベルに拡張すると、以下の原則を加えることができる。

(3) (iii)名詞句の場合は、その主要語が単数であると動詞も単数形で一致し、主要語が複数である場合には、複数形で一致する。

The change in male attitudes is most obvious in industry. —*ibid.*

The changes in male attitude are most obvious in industry. —*ibid.*

(iv)定形及び非定形節は通例単数呼応する。

That he is trying to hide something is all too plain.

—Huddleston & Pullum(2002)

How you got there doesn't concern me. —Quirk, et. al (1985)

To treat them as hostage is criminal. —*ibid.*

Smoking cigarettes is dangerous to your health. —*ibid.*

なお、名詞的表現以外のものが主語にくる場合について、例えば、前置詞句や副詞などが主語となる場合には、通例単数扱いとなる。¹

(4) a. *In the evenings* is best for us. —Quirk, et. al (1985)

b. *From here to London* is over fifty miles.

—Huddleston & Pullum(2002)

c. *Slowly* does it! —Quirk, et. al (1985)

d. *Rather too big for your boots* is what you are, my boy.

—Huddleston & Pullum(2002)

次に、概念的一致は以下のように定義される。

(5) Notional concord is agreement of verb with subject according to the notion of number rather than with the actual presence of the grammatical marker for that

notion. [Quirk, et.al(1985:757)]

例えば, *committee* は, 文法的一致の原理に従うと, (1)(i)より, その語形からすべて単数呼応することになるが, 実際には, その用いられる文脈における意味解釈によって, 単数・複数両方の呼応が可能である。次に示す(6a)では, *committee* が一つの組織として捉えられ, 単数呼応のみが許されるのに対して, (6b)のように, *committee* を構成する一人一人に焦点を当てるような文脈においては, 複数呼応する。(6b)の例では, 複数概念が動詞形と共に, 代名詞の形にも反映されていることにも注意されたい。さらに, (6c)では, 組織全体として捉えるか, 個々の成員に焦点を当てるかで判断が揺らぐことになる。

- (6) a. The committee *was* [**were*] formed six months ago. —Cruse(2000)
b. The committee *are* [**is*] wearing their hats. —*ibid.*
c. One committee, appointed last year, *has* [?*have*] not yet met.
—Huddleston & Pullum (2002)

このように, 概念的一致では, 一致という現象がそもそも言語形式に関する規則なのであるが, 実は各名詞の指示内容 (reference) が優先されるという立場をとる。この立場を擁護する有力な例としては, (7b)のメトニミーが用いられたものをあげることができよう。

- (7) a. The harsh browns *are* [**is*] getting cold. —Polland & Sag (1988)
b. The harsh browns *is* [**are*] getting angry. —*ibid.*

(7a)では文字通り食べ物としての *harsh browns* を意味しているが, (7b)の *harsh browns* では, それを注文した人物をメトニミー的に指示しており, それが一致に反映されることになる。²

また, 概念的一致について, 少し注意しておくべきことは, 集合名詞の一致については, 地域的な差異が見られるということである。集合名詞の扱いは, アメリカ英語とイギリス英語との間で一定の傾向が見られ, イギリス英語において複数呼応する傾向が強いのに対して, アメリカ英語では, 単数呼応することが多い。[Huddlesotn & Pullum(2002:502)]
最後に, 近接的一致の原理は, 以下のように定義される。

- (8) The principle of proximity, also termed ‘attraction,’ denotes agreement of the verb with a closely preceding noun phrase in preference to agreement with the head of the noun phrase that function as subject. [Quirk, et.al(1985:757)]

以下の例については、文法的一致の原理と近接的一致の原理が競合し、容認度に揺れが生じる。

(9) ?*No one except with his own supporters agree with him.* —Quirk, et. al (1985)

(9)では、文法的一致に従うと、*none*に呼応して単数形動詞が要求されることになるが、動詞に近い複数名詞に牽引されて複数呼応することがあるのである。さらに、(9)の例では「(複数いる)彼の支持者のみが彼に賛同している」という文意全体もこの近接的一致の原理を支えていると言えよう。³

実際の文脈では、以上のような3つの原理が競合する場合があり、英語学習者は問題に直面することになる。しかしながら、ある程度どの原理が優先されるか、その傾向が決まっているものもある。例えば、数値を含む以下の例では、概念的一致の原理が容易に作用し、単数呼応することは、一般に容認される。

- (10) a. *Ten pounds is enough.* —Greenbaum (1991)
b. *Two years seems too long to wait.* —*ibid.*
c. *Five miles was as far as they could walk.* —*ibid.*
d. *Two thirds of the area is under water.* —Quirk et al. (1985)

それぞれの数値が、一つの概念として捉え直され、*ten pounds* は *that amount*, *two years* は *that period*, *five miles* は *that distance* のようにひとまとめに把握されていると言え、単数呼応している。したがって、複数呼応する場合とあえてニュアンスの違いを探ると、*Three years have passed since I was last here.* のように複数呼応している背景には、三年を一つの期間としてではなく、一年一年が積み重なって三年経ったことが表現されていると言える。

同様に、*more than...* を含む表現では、*than* 以下にくる名詞の数によって、近接の原理が働き、動詞形式が影響される。また、*many a ...* の句では、その語句の持つスタイル上の‘formality’も関係し、通例単数呼応となる。

- (11) a. *More than a thousand inhabitants have signed the petition.* —Quirk, et. al (1985)
b. *More than one member has protested against the proposal.* —*ibid.*
c. *Many a member has protested against the proposal.* —*ibid.*

このように、3つの原理が競合する場合でも、言語形式によってある程度どの原理が優

先されやすいか慣用的に決まっているものがあるが、その判断が文脈依存する場合には、問題が生じることになる。

以下、主語・動詞一致で問題となる場合を幾つか取り上げ、英語の実態を記述しておきたい。

3. 問題となるケース

3.1. 主語に **and** により等位接続された名詞句がくる場合

まず、2つ以上の名詞（句）が **and** によって並列される場合、通例、複数扱いとなり、文法的一致の原理にしたがって複数動詞形が要求されることになるが、以下の例のように、問題が生じることがある。

(12) “*Heaven and hell is not about ending up in two different places,*” says moral theologian James Burchaell of the University of Notre Dame. “It’s about ending up in this life, and forever in the next, being two very different kinds of persons. It’s about character, not context.” In other words, *heaven and hell are no longer thought of as different locations, with separate ZIP codes, but radically opposed states of intimacy with and alienation from God.*”

—Kenneth Woodward, *Newsweek* [Reid(1991)]

この文脈では、「天国と地獄」というのは、個々に捉える別々の場所ではなく、神学的に一つの複合体としての意義を持つことが述べられており、その主張が主語と動詞の一致にも反映されている例である。このように、**and** で結ばれた名詞句と動詞の一致も必ずしも文法的一致に司れているものではなく、その捉え方が問題となる。こうした、**and** で結ばれた名詞句の一見主語と動詞が一致していない例は、具象名詞がくる場合には、物事の有様が視覚的に明瞭で、複数概念が容易に形成され、文法的な揺れは生じにくい、次の例のように、抽象名詞が結合される場合には、単数呼応・複数呼応の判断が分かれる場合がしばしば認められる。

(13) a. *Your fairness and impartiality* has [have] been much appreciated.

—Quirk, et. al (1985)

b. *Her calmness and confidence* is[are] astonishing.

—*ibid.*

c. *Law and order* has[have] been established.

—*ibid.*

動詞の型式は、ここで述べている概念をそれぞれ個別的な unit とみるか、複合的な unit と見るかにかかっている。従って、以下のように、それぞれの名詞に限定詞を付加すると、個別的な見方をしていることがより明確となり、複数呼応が好まれることになる。

(14) *Your fairness and your impartiality* have been much appreciated.

ただし、形式的に(15)のような構造をとっても単数呼応と複数呼応で揺れることもある。

(15) *Your laziness and your ineptitude* amaze [amazes] me.

—Huddleston & Pullum(2002)

それぞれの呼応によって、伝達される意味は多少異なり、単数呼応の場合は、*your laziness* と *your ineptitude* が驚きを引き起こした一つの原因であることを伝えるが、動詞が複数呼応する場合には、*your laziness* 及び *your ineptitude* それぞれが驚きの原因であることを伝えることになる。

3.2. 主語に **along with, rather than, as well as** などの準等位接続された名詞句がくる場合

等位接続詞の **and** に準じる表現によって等位接続が行われ主語が形成される場合、文法的な一致の原理に従うと、その主要語として機能する先行する名詞の数によって動詞形が決定される。しかしながら、以下の例のように、容認可能性が揺れる場合がある。

(16) a. ?*One man with his wife*, both looking very anxious, were pleading with a guard to let them through. —Quirk, et. al (1985)

b. ?*The President, together with his advisors*, are preparing a statement on the crisis. —*ibid.*

この現象については、後にも少しふれるが、一般的には、ルースな使い方と見なされることが多く、Greenbaum(1991:142)においても動詞の形は必ず主語の主要語の数と一致させるよう促している。

3.3. 主語に **or** あるいは **nor** により等位接続された名詞句がくる場合

and 以外に、**or** によって等位接続される場合にも問題が生じる。以下の例を観察された

い。

- (17) a. *Either the Mayor or her deputy is* [*are] bound to come. —Quirk, et. al (1985)
b. *What I say or what I think is* [*are] no business of yours. —*ibid.*
c. *Either the strikers or the bosses* *has [have] misunderstood the claim. —*ibid.*
d. *Either your brakes or your eyesight is* [?are] at falt. —*ibid.*
e. *Either your eyesight or your brakes are* [?is] at fault. —*ibid.*

(17a), (17b), (17c)の例では、文法的一致の原則で解決できる。すなわち、単数名詞が並列される場合は、単数呼応し、複数名詞が並列される場合には、複数呼応となる。問題は(17d,e)のような並列されるそれぞれの名詞の数が異なる場合で、この場合、文法的一致の原理以外に、概念的一致の原理及び近接的一致の原理が優位に働き、容認度の判断が揺れるのである。結果として、近接的原理が最も強く作用し、動詞に近い名詞の数に一致する傾向が窺える。⁴

neither...nor についても、*either...or* と同様の原理が働くが、文体的差として、話し言葉においては、複数呼応がより自然な言い方となる。この傾向は、文法的判断にやや厳しいGreenbaum(1991:142)においても、同様のコメントがなされている。

- (18) *Neither Mary nor John is*[are] *here yet.*
—Huddleston & Pullum (2002)

neither を含む句が複数呼応しやすいのは、後に扱う *of* 句を従えた不定代名詞としての用法の影響、あるいは概念的に両否定(both not-X and not-Y)の意であることが反映された結果であるとも言える。

なお、実用的な知識としては、これらの選択のジレンマを避ける表現も身につけておく必要がある。(19a,b)のように2番目に来る名詞句を後続させたり、(19c)のように法助動詞を挿入することで迷い生じる動詞形の選択を避けることもできる。

- (19) a. *Either your brakes are at fault or your eyesight is.* —Quirk, et. al (1985)
b. *He hasn't arrived, nor has his wife.* —*ibid.*
c. *Either your brakes or your eyesight may be at fault.* —*ibid.*

3.4. 主語に不定的な表現 (no, none, all, some, any, half やその他の分数表現) が含まれる場合一

主語に不定的な表現 (no, none, all, some, any, half やその他の分数表現) が含まれる場合の文法的一致の原理は、可算名詞が後続する場合には、複数呼応し、不可算名詞が後続する場合には、単数呼応するということになる。

(20) a. *Some of the material* is not suitable for children.

Some of the papers are missing. —Greenbaum(1991)

b. *Half the country* is under water.

Half of the members have voted in favour of the amendment to the constitution. —*ibid.*

c. *All the fruit* has been eaten.

All my friends were abroad. —*ibid.*

ただし、none については、その判断が分かれ、形式ばった言い方では、単数が好まれるが、概念的一致の原理が働くと複数呼応が好まれ、最近では、特にアメリカ英語において複数呼応がより一般的になってきている。前置詞句が後続すると近接的一致の原理も作用し、複数呼応がさらに好まれる。

(21) *None (of the books)* has [have] been place on the shelves. —Quirk, et al.(1985)

either および neither は、単独で用いられると、その語形から一般的に単数呼応する。

(22) The two guests have arrived, and *either* [but *neither*] is welcomed. —*ibid.*

前置詞句が後続する場合には、くだけた言い方で複数呼応することがあり、neither の場合にその傾向が強い。

(23) *Either* [*Neither*] of them are welcome. —*ibid.*

近接の原理は、each, every, everybody, anybody, nobody everyone, anyone を含む表現にも働き、判断が揺れることがある。

(24) a. *Nobody*, not even the teachers, was [?were] listening. —*ibid.*

- b. *Every member of the vast crowd of 50,000 people was [?were] pleased to see him.* —*ibid.*

以上、一致をつかさどる3つの原理を紹介すると共に、語法上問題となるケースを幾つか吟味した。

本稿で援用した Quirk, et. al.(1985)に従うと、一致は3つの原理によって司られており、場合によってはそれぞれの原理が競合し、どの原理が優先されるかは文脈にかかっていると説明できるが、認知言語学の叡知を導入してさらにその一般化を進めると、一つの原理にまとめ上げることができよう。

すでに、本稿の説明の中でふれてきているように、単数呼応と複数呼応が揺れる場合には、主語にきている名詞の見方あるいは捉え方が問題となる。もう少し厳密に言うと、主語と動詞一致の問題は、‘construal’、すなわち認知言語学でいう広い意味での事態の捉え方にかかっている。名詞及び動詞を介しての数の概念化が決め手となるのである。認知言語学の基本的なテーゼとして、それぞれの言語記号がそれぞれ概念的な意味を持つという考え方(a symbolic view of language)があるが、それを主語と動詞の一致に当てはめると、「主語にくる文法要素の概念化と動詞形式の概念化との一致」ということになる。⁵ これは機械的(operational)あるいは派生的な(derivational)単なる形式の一致として捉えるものではなく、それぞれの概念化の「首尾一貫性」として理解すべきものである。

このような考え方から、Quirk et. al (1985)で示された3つの原理を再考してみると、Quirk, et.al(1985)のいう文法的な一致と概念的な一致は、用語の混同を避けるために別の名称を用いると、「認知的な一致」ということで統合でき、シンプルな形で、それぞれの名詞および動詞の概念化が形式に反映され、それらが認知的に首尾一貫性を保ち、一致しているものとして捉え直すことができる。Quirk et al.(1985)の概念的な一致で問題となった集合名詞のケースについては、集合名詞の概念化自体は、その形式が暗示するように、まず、単数の概念化が行われるが、その名詞が表す意味内容の「認知的顕著さ」(cognitive salience)が動詞の形式を選択する決め手となり、動詞の単数形式あるいは動詞の複数形式が選択されるのである。さらに、近接による一致については、言語の線状性の中で、主語に後続する要素によって、動詞の概念化に揺らぎが生じ、その揺らぎが動詞形式に反映されて、単数呼応と複数呼応に分かれる現象ということになる。

Reid (1991)にしたがって、ある言語記号の単数の概念化をONE、複数の概念化をMORE THAN ONE で表示すると、以下のようにまとめ上げることができる。

(25) 主語と動詞の一致についての英語学的エッセンシャルミニマム

主語にくる名詞の意味概念が、ONE と概念化される場合には、通例その概念化に呼応し、動詞形も単数概念化を反映する形式を取る。一方、MORE THAN ONE とし

て概念化される場合には、動詞形はその複数概念化を反映した形式をとる。

さらに補足的に述べると、主語にくる名詞の単数形には、以下のような概念化が反映される。

- (i) 実体を数えられるものとして捉え、同種の集合体から任意の一員を抽出し、ONEとして表す。
- (ii) 構成する個々の成員に拘わらず、全体を一つの単位として捉え、ONEとして表す。
- (iii) ある抽象概念をひとつの事柄と捉え、ONEとして表す。
- (iv) 定まった形状をもたない物質そのものを一つの全体として捉え、ONEとして表す。
- (v) 異種の成員からなり、プロトタイプを定められない集合体を一つの全体として捉え、ONEとして表す。

一方、名詞の複数形には、以下のような概念化が反映される。

- (i) 実体を同種の集合体として数えられるものとして捉え、MORE THAN ONEとして表す。
- (ii) 個別化する必要のない実体のかたまりを複数概念で捉え、MORE THAN ONEとして表す。⁶

以上、英語学的な観点から主語と動詞の一致の問題を考察したが、(26)の一般化を英語学習者がすぐに応用して、具体的な問題を解決していくことは、やや難しい。次節で、具体的に TOEIC で出題されると予測される問題の分析を通し、実践的な知識としてどのようなことが求められるのかを考えていこう。

4. TOEIC で求められる文法力ー主語・動詞の一致の場合ー

TOEIC の Reading Section PartVIIにおいて、必ず問われる主語・動詞の一致に関する問題の分析を通じて、TOEIC でどのような文法力の保持を求めているのか明らかにし、当該の問題について、もう少し幅広い学習英文法の立場から、最終的にどのような文法知識を習得すべきなのか、あるいは、教える側の立場から、どう教授すべきなのか再考してみたい。

以下、島根大学において共通テキストとして利用している Longman Preparation Series for the TOEIC Test (Intermediate Course)[The Third Edition, 2005]に記載されている

Subject-verb agreement に関する Error Recognition の問題について、その巻末にある Answer Keys に従って「正解」を示し、その解説を試みよう。

1. The office furniture that was ordered last month have just arrived, but Mr. Ames and I aren't sure exactly how the boss wants us to arrange it.

A B
C D

解説：B が誤り。主語が不可算名詞の場合は単数呼応し、また、and で等位接続される名詞句となる場合は複数呼応する。

2. The news from various stock markets weren't optimistic, so investors worldwide have become nervous, stock values are suffering, and big sell-offs are expected.

A B C D

解説：A が誤り。-s で終わる名詞が必ずしも複数呼応しないという知識が必要。news という名詞はその一例。

3. A number of people who works in this company feel that the benefits package isn't as attractive as it was in previous years.

A B C D

解説：A が誤り。a number of は数量詞として、「相当数の、多くの」の意で用いられ、複数呼応する。

4. The airport custodial staff, which hasn't been working under contract for a year, are thinking about striking if management doesn't agree to salary increases.

A B C D

解説：B が誤り。staff は集合名詞として複数扱いとなる名詞。

5. Either Mr. Burton or Ms. Leeds is going to get that promotion, but the board of directors haven't decided yet who is better qualified and deserves it more.

A B C D

解説：B が誤り。前置詞句などが後続する名詞句では、その主要語の数によって動詞形が決定される。The board of directors の主要語は board であり、単数扱いとなる。なお、either...or で導かれる名詞句は、後続する名詞の数によって動詞形が決定される。

6. When everybody get here, we have to hold a meeting to elect a new chairperson,
decide if the new curriculum is to be adopted, and agree on a date for our holiday
party.

解説：A が誤り。everybody は不定代名詞として用いられ単数呼応する。

7. The mailroom, together with the copy center is being renovated so that production
is increased, lighting is made better, and general working conditions are improved.

解説：A が誤り。together with... という準等位接続表現を含む主語は、概念的一致の原則が優先され、複数呼応する。

8. Because all our members vote to have a retreat each year but only half attends,
the union president says general funds are not going to be used this year to pay the
expenses.

解説：B が誤り。不定的な half は、それが表す名詞の解釈によって呼応が決定され、この場合は、half of our members の意となり、複数呼応となる。

9. The United States have sent a report to the World Health Organization in which
it claims that measles is increasing in number of reported cases, but cases of
chicken pox are down.

解説：C が誤り。病気を表す名詞は-s で終わるものがいくつかあるが、単数呼応する。

10. Of all the subjects we avoid discussing, religion is certainly one, raising children
is another, family values are a third, and politics are at the top of the list.

解説：D が誤り。学問を表す名詞は-s で終わるものが多いが、単数呼応する。

以上の分析から、一般的に、TOEIC では、文法的一致の原理の習得のみでほぼ対応でき、そのエッセンスは以下のように言い切ることができる。

(26) 主語と動詞の一致についての TOEIC 文法エッセンシャルミニマム

文法的一致の原理に従い、主語の主要語が単数形の場合、単数動詞形で一致し、主語が複数形の場合、複数動詞形で一致する。

しかしながら、7のように、時に、容認度が揺れる語法についても問われることがある。これについては、すでに言及したが、文法的一致の原理と概念的一致、あるいは近接の原理が競合するケースとして問題になるものであり、Quirk, et. al. (1985)の判断においても、その容認度の揺れが現れている。このような文法現象について、*The New Fowler's Modern English Usage* (edited by R.W. Burchfield, The Third Edition, 1996)の agreement の項目(p.35)においては、以下のように述べられている。

(27) Nouns joined by other linking words or quasi-coordinators (e.g. accompanied by, as well as, not to mention, together with, etc.) are followed by a singular verb if the first noun or noun phrase is singular: *A very profitable company such as British Telecom, along with many other companies in the UK, is not prepared to pay a reasonable amount ;Daddy had the hairy tweed jacket with leather elbow patches with, together with his pipe, was his trade mark.*

したがって、この記述に従うと、A は単数呼応のままよく、7 の正解は「なし」ということになり、不適切な問題となる。

なお、TOEIC 解法のための文法知識としては、2に見られるように、news, means 等の名詞のように複数数を暗示する語尾(-s)を含んでいても、規則上、単数呼応することもあることは知っておく必要がある。その代表的なものは、9 で出題されている病気の名称を表す名詞と 10 の学問を表す名詞である。それらの代表的なものは、習得しておく必要がある。

(28) 病気名: measles, mumps, rickets, etc.

学問名: civics, economics, linguistics, mathematics, physics, etc.

—Greenbaum (1991)

さらに、集合名詞についての知識も必要で、(29)のような頻度の高いものについてのリストが必要となろう。TOEIC 自体は、アメリカ合衆国で作成されているので、基本的にはアメリカ英語準拠であると考えてよいであろう。したがって、本稿との関わりでいうと、上記の集合名詞は、一般に単数扱いの設問が多く見られる。

(29) administration, army, audience, class, crew, crowd, enemy, firm, family, fleet, gang, government, group, heard, jury, mob, nation, public, swarm, team, etc.

—*ibid.*

以上、主語と動詞の一致に関する TOEIC 問題の解法という観点から述べてきたが、英語の実態を説明する英語学的な一般化と TOEIC で求められる文法力を述べた一般化との間にはやや乖離があるように思われる。英語学的な説明は抽象的な一般化になる傾向があり、実践的な英語とはいえ、TOEIC で求められる文法力は、規範文法的なものに近い。新しい学習英文法として、両者をどのように結びつけたらよいのか、次節で考えてみたい。

5. 学習英文法において何を教えるか

学習英文法においては、単なる個別の知識を羅列した文法知識だけではなく、すべての英語の実態を理解し、それを納得していける「基本的な文法的考え方」を盛り込んでおく必要がある。ただし、常に英語学習者の立場に立って、難解な抽象的概念や専門用語等は避け、日常的な言葉で語るべきである。したがって、(25)で示した英語学的な主語と動詞の一致に関する文法的一般化は、以下のようにまとめ直す必要がある。

(30) 主語と動詞の一致についての学習英文法エッセンシャルミニマム

英語において、主語にくる名詞の形と動詞の形は、数の捉え方が一致し、それぞれ適切な形式が選択される。すなわち、主語が名詞の種類によって単数概念で捉えられる場合には、動詞もそれに呼応して単数形として必要な形式的変化をし、主語が複数概念で捉えられる場合には、動詞も複数形としてふさわしい形式が用いられる。

(30)のような基本的な考え方を示した上で、学習英文法においては、名詞の種類（普通名詞、物質名詞、抽象名詞、集合名詞、固有名詞等）について詳説し、それらを機能的に可算名詞と不可算名詞に分類しながら、それぞれが単数と複数のどちらに捉えられるかを説明していくことになる。次に、注意すべき例として、集合名詞、並びに形式上は複数形を示唆するが単数呼応していく病気や学問を表す名詞グループについての解説を行っていくことになろう。その際、英米における地域差にも着目し、集合名詞の取扱いの傾向などについてもふれる必要がある。

このように、学習英文法における説明は、基本的な考え方を基礎として、知識の羅列に終わってはいけませんが、やはりできるだけ具体的な例を提示しながら説明していくことが望ましい。学校文法によく見られるように、単純な規則化を行うことだけで済ませてしま

うと、その規則の過度の適用 (oversimplification) が生じ、英語学習者は誤った結論を導いてしまうことがよくある。[cf. Close(1981:24)]

また、学習英文法においては、受信型の文法と発信型の英文法の区別もある程度必要となろう。主語と動詞の一致の問題に関しても、受信型の学習英文法では、本稿の第3節の「問題となるケース」で扱った揺れが生じる場合についても現代英語の実態として受け入れる柔軟な姿勢が必要であるが、発信型の学習英文法においては、相手に誤解を生じないようにやや規範的な態度に立つほうが、効果的なコミュニケーションを行うことができる。

このように必要な事柄を積み重ねていくと、学習英文法は量的に増えていくことになるが、学習者の習熟度に従って、段階的に学んでいくプロセスも取り入れていかなければならない。文法の各項目について、学習英文法のエッセンシャルミニマムの集約から出発して、TOEICにも十分対応できる学習英文法全体を構築していく地道な作業が今後期待される。

6. おわりに

本稿では、主語と動詞の一致の問題を取り上げ、まずその英語の実態を記述することから議論を始め、英語学的にその文法現象がいかに関一般化できるかということに相当な紙面を割き、認知言語学的にその文法現象をまとめた。さらに、TOEICの問題を分析することにより、現実的な実践的知識として、どのようなレベルの文法知識が求められているのかを明らかにし、それにも十分対応できるよう、新しい学習英文法においてどのような説明をし、どのような文法知識を英語学習者に与えていくべきか、その指針を示した。

本稿では、主語と動詞の一致の問題に絞って議論したが、今後、その他の文法項目についても、これまでの英語学的研究の集積を再吟味するとともに、TOEICなどの分析も踏まえ、英語学習者にとって必要な文法知識をわかりやすい言葉で纏め上げていく作業が必要となる。本稿がそのきっかけとなり、新たな枠組みを構築していく出発点となれば幸いである。

注

- 1 関係代名詞の *what* は、その内包する意味によって一致が決定される[cf. Greenbaum(1991:147)]: *What worries me is that he has not yet made up his mind./ They live in what are called ranch houses.* 疑問詞の *what* は通例単数呼応するのが原則であるが、予測される答えが複数であると想定されると複数呼応が可能である[Huddleston & Pullum (2002:506)]: *What are going to be deciding factors?/ What have pointed ears and long tails?* こうしたことは、他の疑問詞の *who* にもあてはまる。

- 2 名詞句の意味の差は、主語と動詞の一致ばかりでなく、次のように代名詞の一致にも反映される [Pollard & Sag (1988:243)]: The harsh browns at table nine said *he*[**they*] can't find the men's room.
- 3 容認度は下がるが、近接する名詞が単数の場合であっても、等位接続が含まれる名詞群がくる場合、動詞は複数呼応することがある : ?*A good knowledge of English, Russian, and French, *are* required for this position. —Quirk, et. al (1985)
- 4 not only/just/merely...but(also/even)も either...or と同じ原理で説明できる。以下の例を参照されたい[Quirk, et al.(1985:763) : Not only he but his wife *has* arrived./ Not (only) one but all of us *were* invited./ Not just the students but even their teacher *is* enjoying the film.
- 5 認知言語学においては、一つの記号がそれぞれ概念的意味を持つと仮定され、Langacker(1988:172)において、一致の現象は以下のようにまとめられている: In cognitive grammar, agreement markings are viewed as being predications in their own right. Let us first consider the matter abstractly. Suppose an agreement pattern has the basic form A+x...B+x', where x is an inflection representing some property of A, and x' agrees with x (though they need not be formally identical); that is even though x' is manifested on B, its selection is in some way determined by x and this reflects an aspect of A. (Alternatively, the pattern might simply be A...B+x", with x' determined by A directly.) It would be counter to both the letter and the spirit of cognitive grammar to describe this situation by a rule that "copies" x from A onto B, or in terms of features "percolating" up, down, across, around, or through. Instead, x and x' are both analyzed as meaningful symbolic units. Their co-occurrence may be required rather than optional, and it may be partially or even wholly redundant, but each has its own meaning and makes some kind of semantic contribution.
- 6 いわゆる絶対複数 (pluralia tantum) と分類されるものを言っている。

参考文献

- Burchfield, R.W. (ed.) *Fowler's Modern English Usage*. (The Third Edition) Clarendon Press.
- Close, R. A. (1981) *English As a Foreign Language*. (Third Edition) George Allen & Unwin.
- Cruse, A. (2000) *Meaning in Language*. Oxford University Press.
- Greenbaum, S. (1991) *An Introduction to English Grammar*. Longman.
- Huddleston, R. & G.K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Langacker, R. W. (1988) "Autonomy, Agreement, and Cognitive Grammar." *CLS* 24, Part Two: Parasession on Agreement in Grammatical Theory, 147-180.
- Pollard, C. and I. Sag (1988) "An information-based Theory of Agreement," *CLS* 24, Part Two:

Parasession on Agreement in Grammatical Theory, 236-257

Quirk, et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Reid, W. (1991) *Verb & Noun Number in English*. Longman.